NPO 法人岡崎がくどうの会

放課後児童支援員キャリアアップ研修レポート

【クラブ】（たけのこクラブ）　【名前】（　岩井　里真　）

テーマ【発達障害児など配慮を必要とする子どもへの支援】

今回のテーマは『発達障害児など配慮を必要とする子どもへの支援』では、具体的な支援についてお話が聞けると思い参加しましたが、具体的なケースや事例ではなく、発達障がいの名称や概念等のお話でした。実際に私が学生時代に学んできた時とは、名称や基準が変わっていました。学生当時を思いかえしてみても国内だけの話ではありますが、『障害』と『障がい』や『注意欠陥多動症』と『注意欠如多動症』といったように表記を変更する、など、障害に対する考え方は年々変わっているのだと感じました。

特に今回の講義の中で印象にのこったことは『ニューロ・ダイバーシティ』についてでした。資料には『この中で何個当てはまりますか？・暇なときはなるべく誰かと一緒に過ごしたい・集団の和を乱す人が許せない・社会の習慣にまず従うべきだ・はっきりと本音を言うことが苦手・必要なら平気でウソをつける→1 つでも当てはまった人は定型発達症候群（多数派）。これらは発達障害の人たちから見れば、不思議な存在になる』とあります。多数派が『正常』『普通』という考えが『障害』という概念が生まれてしまうのだと感じました。一方でこれまでの保育園等での保育経験の中で保育士さんや保護者の方から実際に見たり聞いたりしたことですが、周囲の大人が幼児期に発達特性を認め適切な支援を行った子どもと、『障害』という言葉から特性を認めることができず、支援の手を差し伸べることができなかった子ども達では子ども自身が大人になった時の生活の中での困り感が違うということがありました。無論、支援の有無が全て当てはるわけではありませんが、発達特性を理解し個々に合った関わりを行うことで多くの人が生活しやすくなる環境をつくれるとよいと思いました。そのためにも、親をはじめとする子ども達に関わる周囲の人々、世の中全体が、『障害』という意味をもっとしっかりと理解する必要があります。そして、障害を発達特性と捉え、「“特性の違い”を尊重し合いそれらを活かしていこうという」というニューロダイバシティの考え方に至ると多くの人が生きやすい環境ができると思いました。私自身もっと子ども一人ひとりに寄り添って、一人ひとりに合った声掛けや援助をしていける保育士になりたいです。

後半のグループワークは振り分け後話始める人がいない、司会、発表者、記入者を決められない等よくある時間ができてしまい、話し込むことは出来ませんでした。